ふるさとだより

月刊 第592号

変りゆく中で ふるさとは

何となく「合併」と言いつづけてきた言葉がこのところ急に現実味を帯び一つひとつ具体的な生活に直接関わる事について考えはじめてみると、今更ながらと思いつつも煩らわしさが先にたってしまって、いったいどうなることやらとあっちこっちで年内に目途がつくように進められている工事にせきたてられるように不安感がつのる思いのする此頃です。

年賀欠礼のハガキが次々に届きそろそろ来年のカレンダーも配られ始め、近年は切絵ブームで八丁紙も手の込んだ素晴しい物が目を楽しませてくれます。

そろそろ年賀状の準備も始まっているようですが所番地をどう表示したら良いのかも定かでなく郵便番号があれば大丈夫であろうし、実の所住所録も確実に整理できている状態でなく、自分の住所はとりあえず新潟県寺泊町で行こうと決めているような次第です。

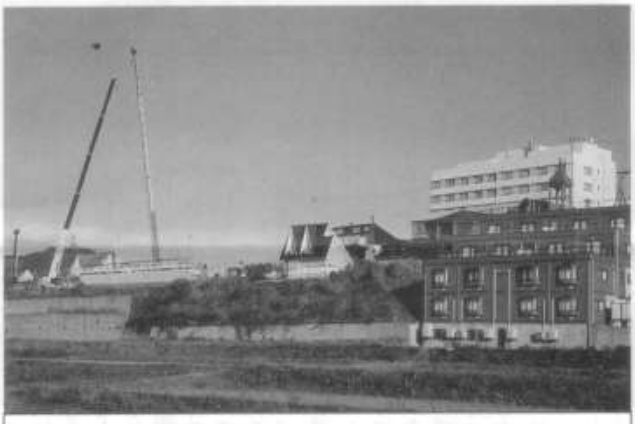
考えてみれば三十数年前の町村合併で旧大河津村が大半は寺泊町に合併したものの、与板町分水町と三つに分裂した形をとらざるを得なかった現状がありその後も随分長い間しっくりしない状況が色々な場面で出てきた事が今更ながら思われて参ります。

「ふるさと」の要素は血と土と言葉にあると言った人があるが「血」も随分と薄まってむしろ都会に親戚が多く集っていて、かつては法事などの時に実家に一族郎党が集うと言う形だったものが、都会地に皆が集るから住職出張頼むよなどと言う形もポツポツ現れ始めている。言葉に至っては「い」と「え」の発音などは仲々昔のままだが、もう寺泊弁も珍らしいことでふるさとの要素からは随分遠のいた感しきりである。先日四十代から六十代の住職六人程が集った時のこと料理が話題となり「きらず」と言ったら誰も知らないと言うので唖然としてしまった。「きらず」は勿論「おから」のことで私も随分古い人間になってしまったものと自覚。

いよいよ閉町式の日取りも決まり十二月十七日十時文化会館はまなすで式典が催される。今年も様々な行事がくりひろげられて来たがその一つひとつは寺泊町最後の催しであった。十一月十二日には統合寺泊中学校十周年の式典が挙行され、二十日には芸能祭が賑やかに開催された。又演劇研究会の「初君」の舞台が二十六日長岡市のリリックホールで上演されると言う。「土」のことで言うなら海や山の景観は昔のままであるが田園風景や道路の状況それに沿う町並みや集落の姿は随分変った。

北防波堤から町を望む。晩秋の陽射しの中で里山は紅葉して町を抱き、海は凪いで港を調す。
手前の箱は冬蛸漁のもの。

初冬の海も時にはこんな穏やかな顔を見せる。
波はやさしく磯を洗い、弥彦の嶺は最後の錦を輝やかせる。



野積の岬に湧出した温泉を利用しての浴場建設の工事が始まった。手前の建物アネックス飛鳥と奥のホテル飛鳥と連動することになる。

団地造成等で一気に変化する場合は気づき易いが少しづつ変る家並みなどは気づかぬ中で家が無くなり住む人が入れ変り、かつての姿を思い出そうとしても記憶が茫々として仲々思い出せない。海岸線の状況もすっかり変り果ててしまったが、長岡市への合併を機に写真等で記録整理の時と感じている。誰がどのような形でその作業をするのか。かつて民謡研究家の竹内勉先生が全国各地に伝わる民謡等の伝承について「そこに住む人、気のついた人」と言われたことが思い起こされる。

町には立派な町史も已に出版されており、ふるさとだよりでも四十年分の合刷版が出版されている。写真を主体としたものでパラパラと気軽にめくって一目でわかるようなものがあればと思っている。資料さえ集まればパソコン等で割りと簡単に仕上げられそうに思うのだが。

うつらうつらする中で閉町式の一場面を夢見た。町旗が納められる時誰からともなく「寺泊」を八回連呼する応援歌（旧制新潟中学の応援歌が元歌でかつて青年団の大会などで歌われた）が歌われはじめやがて場内大合唱となる中で目が覚めた。何だかジーンときた気分だった。

寺泊の代表的な花にツワブキの花がある。
群生する花は新道の土手を黄一色に染める。
これは密蔵院の前庭にひっそりと咲く姿。

皇居へ行って

さとうのぶひと

とっておきの寺泊の景色をもう一つ。十月末の午後のこと。「コロニー白岩の里」を抜けて野積橋を渡り、市坂を下ったあたりで左にハンドルを切ります。崖下につけられた新田の農道をゆっくり川に向って進むと、砂場の手前でクルマは行き止まりです。クルマを降り、行き止まりのチェーンをまたいで砂場へ出ました。「信濃川分水河口」。目の前に広大な三角州が開けます。

波打ち際まで歩き川上に視線を移すと、野積橋のデリケートな直線が緑の丘陵を白く切り込んでいます。ここから眺める野積橋は、美的感興をともなって感動的です。思わず息を呑みました。振り返れば、弥彦山の稜線が天空を指差して神々しさを加えます。ここには寺泊でもっとも雄大な景観が展開しています。

しかし、砂場のこのひどい汚れようは。着いた流木はむしろ砂場を飾るアクセントになりえていますが、人間の吐き出した数々のゴミは興醒めを誘います。雨の多い年はゴミも多いとのこと。人影のない河口の砂浜を歩きながら、なぜか廃墟に立ち尽くしているような心地になりました。

さて先日、東京へ展覧会を見に行ってまいりました。「宮殿とモスクの至宝」というタイトルのイスラーム美術展です。イスラーム美術のコレクションがこれだけ揃って来日するのは近年にないことです。かねがね、イスラーム勢力に対する無理解が世界に不幸をもたらしていると感じていました。イスラーム理解の助けになればと思って。

偶像崇拝の禁じられたイスラームでは、神の国の崇高性を模様やデザインでしか表現できませんでした。モスク（礼拝堂）の壁面のタイル、絨毯、壺や水差し、現代で普通に目にしている模様やデザインの源泉がイスラーム文化の中にありました。

そのついでに今回、時間の余裕があったもので、東京駅から歩いて皇居に行ってまいりました。丸の内から大手門を入り、天守台に登って皇居東御苑を一周しました。

照明寺観音堂の前には三十三観音が並ぶ。
周囲はイチョウとケヤキの葉が散り敷いて、それが仏達を飾る荘厳ともなっている。

大和田に鯨塚があると言うので訪ねてみた。
脇にはツバキの古木があり美しい花を咲かすと言う。
白い大きな肋骨が墓石に寄りかかっていた。

フランスの思想家ロラン・バルトによって「空虚の中心」と呼ばれた皇居。なるほどそこには何もないことがよく理解できました。

西洋の都市は中心から放射状に発展し、周縁まで行ったり来たりの出入りが容易です。中国の都は格子状につくられ、一番上に中心になる王宮があります。いずれも実在の中心から秩序を生み出す力が流れて。

ところが東京は「電車も自動車の流れも、都心部に近づくとみんながメリーゴーランドのような動きに入ることを強制される」（中沢新一）。皇居を迂回しぐるぐる回っていて、中心はドーナツの穴のように空虚なのです。実在感がない。「このような構造をもった首都は、世界にもめずらしい」（同）。

東京に十数年住んでいたにもかかわらず、皇居へは一度も足を運んだことがありませんでした。ロラン・バルトや中沢新一を読まなかったら、今回も行こうという気にならなかったでしょう。しかし、収穫はありました。三の丸尚蔵館で催されていた「やまとうた」というタイトルの展覧会です。皇居という特別な場所がもたらす雰囲気のせいでしょうか、王朝の貴人たちの息遣いが聞こえてくるようで。

記憶をたどると、皇居へはかつて一度だけ行っていました。中学3年生の修学旅行。二重橋前の集合写真が何よりの証拠です。昭和38年のことになります。

当時、寺泊中学3年生の修学旅行先は、東京、鎌倉、箱根でした。確か、鎌倉と箱根に一泊ずつの二泊三日で。新幹線のない時代のこと、今から考えてもかなりの強行軍だったと思われます。

写真があるのですから皇居へ行っているはずなのですが、まったく記憶が抜け落ち思い出せません。皇居で何を見、何をしたのか？　雨雲が垂れ込めていたような気がします。モノクロームの世界に、急な小雨が降り出したようなかすかな感触が残っています。

大体が修学旅行の記憶は楽しいものでありません。行きたくもない所を引きずり回され、先生にどなられてばかりいて、事故を未然に防ごうというのでしょうか、自由時間が極端に少なかったのです。四六時中、生徒を管理下に置かなければならなかった先生方は、もっと大変でした。

修学旅行でよく覚えているのは、手拭いを縫った袋の中に、2合か3合の米を持参させられたことです。箱根の旅館でそれを収集する係の仲居さんが、「越後の生徒さんのお米はおいしくてねえ」と言っていたのを覚えています。当時はまだ、食糧難の時代を完全には脱し切っていなかったのです。

誌代御後援（敬称略・順不同）

東京都　廣川　幸三　金三千円
西東京市　吉田　トミ　金五千円
岐阜市　福田　幸子　金一万円
静岡市　河合美恵子　金三千円
寺泊町　加藤　千代　金五千円
〃　井木　清　金三千円
〃　大塚　勇　金三千円
〃　前田　コト　金五千円
〃　深滝　弘　金五千円
〃　杉沢　繁雄　金三千円
〃　西山　孝　金一万円
〃　河合　誠司　金五千円
〃　内藤　廣利　金三千円

前号平石孝義さんが義孝になっていましたので訂正お詫び申上げます。

花を食べる。何と美しい食習慣ではないか。最近は洋食のサラダなどに花が添えられることもあるが歴史が違う。カキノモトの群生。

めっきり見かけなくなった大根干し。
かつては丁寧に縄で編んで吊した。
やっぱりマンマにはコーコが無くてはね。

今日は鮭が大漁。ざっと1500本が水揚げされた。
こんな日はひと重ねづつ競られる。
箱の積み方も仲々面倒なのである。

小波会十一月句会詠草

兼題　刈田・文化の日他当季

越後は
稲藁匂ふ刈田かな　江原　汀子

越の原
刈田となりし広さかな　小島　冬扇

曠野かな
刈田を風のわたりゆく　中村　流瓢

雑草の
はびこるままに遠刈田　小島　温石

無声の詩
吟じ国上の刈田中　大越碧水子

文化の日
絵画館前人の列　小形　美代

友はみな
力作ばかり文化祭　水沢　蕉子

文化祭
町の書画展賑わえり　竹内　霍山

この世をば
ぶらり見ている通草（あけび）かな　能登　頑牛

千輪の菊
千輪の香りかな　加勢　白汀

鳥渡る
佐渡は幕を開けにけり　外山きよし

根あがりの
松のふところ石蕗の花　内藤　蓮子

ふと足を
止めて数える帰り花　外山　海子

あとがき

「ほんこ荒れ」と言われている冬本番を迎える前の不安定な天候で今晩もゴロゴロと雷鳴の中で激しい風雨となりました。私の寺では寺泊で一番遅い「報恩講」で昼間のお参りにつづいて夜の「おしょや」がつとまりその後お参りの人達、と言っても二十人足らずの人達とテーブルを囲んで何やかやと雑談しながらの夜食、話題は変っても又夜食の内容もそれぞれの寺で天麩羅そばや赤飯や心づくしのご馳走と飲物でひと時を過ごす姿は昔からの慣わしの姿であります。後片づけも済んで皆さん帰られた後急に風雨が強まり、明日もう一日あるお参りのことをこのまま荒れがつづけばお参りも無かろうになどと心配しながら「あとがき」の筆を走らせています。とまあこんな具合の片手間の形での執筆で申訳ないと思いながらしみじみと振り返ってみる五十年になんなんとする「ふるさとだより」の歴史、ほとんどを孤軍奮闘された聖徳寺故窪沢泰忍師の真向対決の姿が唯々なつかしく忍ばれて参ります。近々終刊のご報告とお詫びにご佛前にお参りにと思っております。四十年分は縮刷合本発行済みですが最後の十年分を縮刷で出版の場合どれ位の希望者がおいでのものか出版技術も変ってきているので案外簡便にできるのではないかと思うのですが皆様のご希望や如何に。

毎月二十日発行
寺泊ふるさとだより
誌代税共（百円）
編集人　中村興樹
発行人
発行所　新潟県寺泊町　ふるさとだより
郵便番号　九四〇―二五〇二
ダイヤル局番　〇二五八七五
電話　二〇二九番
振替番号〇〇六二〇―三―五七四五
印刷所　吉野印刷株式会社

落ち水の滝である。ここが寺泊と出雲崎の境界線、和島から良寛さまも通われた道。
こんな川へも鮭が上ってくる。

芸能祭でのコールエコーはまなす合唱団の熱演。
今回はハーモニカの倉井夏樹君（高校二年）とのジョイントもあった。

寺泊小学校では6年生が米づくり（モチ米）に挑戦。
六俵の収穫をあげ、赤飯にしてお年寄りの家庭へ配った。